

## 知覚動詞補部構造に関する覚え書き(続)

加藤力也

1. はじめに
2. Akmajian (1977)
3. Declerck (1982) (以上前号)
4. 考察

### 4. 考 察

4.1.1 2.1に於いて、Akmajian (1977) は *the moon rising over the mountain* のような NP Ving… という連鎖 (sequence) は、異った構造の文に現れても、その構造は変わらないという前提に立って議論を進めているようであるが、果してこの前提はそれほど自明のことであろうか？ (変形 (transformation) 操作そのものが厳しく制限されるようになって来ている現今ではあるが、) 一般に変形によって影響を受ける連鎖は一つの構成素 (constituent) であると認めるとすれば、(3 a~c) に於けるそれは1つの構成素であり<sup>27</sup>、また一般にまぎれのない NP のみに適用される変形であると認めるとすれば、(4 a~c) に於けるそれは単一の NP 構成素であると認めてよいであろう。さらに (5 a, b) に於けるそれが NP であることは疑問の余地がないであろう。

特に (54a, b) では複合関係代名詞である *what* と、(54c) ではそれと似た性質を持つ (いわゆる強調構文の) 関係代名詞 *that*<sup>28</sup> と対置されており、(55a~c) に於いては単一名詞である *sight* と対置されているのであるから、これらの文に於いては、*the moon rising over the mountain* が *the moon* を何らかの主要部 (head) とした1つの単位 (NP) に収斂していると感ぜられるのは自然である。

- (54) a. *What we saw was the moon rising over the mountain.* (= (3a) )  
 b. *We saw what we had all hoped to see: the moon rising over the mountain.* (= (3b) )  
 c. *It was the moon rising over the mountain that we saw.* (= (4a) )
- (55) a. *The moon rising over the mountain was a breathtaking sight to see.* (= (4b) )  
 b. *The moon rising over the mountain is a beautiful sight.* (= (5a) )  
 c. *The sight of the moon rising over the mountain was breathtaking.* (= (5b) )

たしかに、(56 a) の *the moon rising over the mountain* のような真の現在分詞知覚動詞補部 (P-PPVC) は、(54a~c) の同じ連鎖と密接な関係を持つし、また (55a~c) に見られるように *sight* のような知覚を表わす名詞とともに用いられた連鎖とも密接な関係を持つことは疑いないであろうが<sup>29</sup>、素朴な疑問は、「目的語」+「目的格補語」としたり「ネクサス目的語」としたりする伝統文法に影響されているのかもしれないが、(一番直接的な対応関係を持つと考えられる (56b) は留保するとしても) それ程1つの単位に収斂していないのではないかという事である。このことは (56c) にも当てはまるように思われる<sup>30</sup>

- (56) a. *We saw the moon rising over the mountain* (= (2a) )  
 b. *The moon rising over the mountain has been witnessed by many a lover on Lover's Lane.* (= (4c) )  
 c. *You can see, but you certainly can't hear, the moon rising over the mountain.* (= (3c) )

少なくとも、現在の段階では、同じ連鎖であっても、異なる構造に現れた場合には、(意味も含めて)異なる構造である可能性があることを踏まえて考察を進めることにする。

4.1.2 2.2に於いて、A. は NP であるとした P-PPVC に S の源を持つのではなく、主要部 NP と動詞句である補部から成る構造 (13) を与えるための議論を進めているが、直接知覚動詞の後に来る構造にふれている

のは (A) の S として資格を備えていないという議論<sup>31</sup>のみであり、(B) の数一致、(C) の外置、(D) の照応関係<sup>32</sup>からの議論はすべて間接的なものである。

特に、直接先の構造を与える根拠となった (B) の数一致に関する事実との関連で取り上げられた (57a~d) についての議論は発想が逆転しているように思われる。

- (57) a. *The moon and Venus rising in conjunction have (\*has) often been {observed / photographed} by the astronomers at Kitt Peak. (= (9b) )*  
 b. *The moons of Jupiter rotating in their orbits are (\*is) beautiful to watch. (= (10a) )*  
 c. *The moons of Jupiter rotating in their orbits are (\*is) a breathtaking sight. (= (10b) )*  
 d. *What we saw were (\*was) the moons of Jupiter rotating in their orbits. (= (12a) )*

単数一致が行なわれていればこそ出来事(event)を表わす真の P-PPVC との密接な関係が伺えるところであるのに、複数の一致が行なわれているのは、これらの文の NP Ving…の連鎖が、NP が主要部で Ving…が単なる(制限的)修飾部となっている junction 構造であり、真の P-PPVC と無関係なものとみなすべきであろう。

また、2.3に於いて空虚な外置の議論に用いられることになる (17b), (18b) は、Gee (1977), Declerk (1977) も指摘するように、基底構造とされる (17a), (18a) とは意味が異なっている。この Ving…連鎖がいわゆる「分詞構文<sup>33</sup>と同じ性質のものであることは、(58a, b), (59a, b) がまったく同じ意味であることで明らかである。

- (58) a. *The moon looks specutacular rising over the mountain. (= (17b) )*  
 b. *Rising over the mountain, the moon looks specutacular.*  
 (59) a. *The bells make a soothing sound ringing at sunset. (= (18b) )*  
 b. *Ringng at sunset, the bells make a soothing sound.*

また、名詞句からの外置と無関係であることは (60a~c) から明らかで

ある<sup>34</sup>

- (60) a. \**Of a new book about China, a review will appear soon.* (cf. (14))  
 b. \**Who we all knew, a man walk in.* (cf. (15))  
 c. \**That NPs are cyclic, new evidence was presented.* (cf. (16))

4.1.3. 2.3に於いて、A. は基底構造では単一の NP である NP Ving… が (26a) ⇒ (26b) のような外置を受けて NP と Ving… という独立した構成素から成っているとする議論を進めている。前節で見た通り外置の動機そのものは、根拠のないものであるが、ここには真の P-PPVC 構造の解明にとって極めて重要なデータが与えられているように思われる。勿論、(22a~c) も NP が Ving… と独立したものであることを伺わせるのに十分であるが<sup>35</sup>、特に重要と思われるのは、(61a, b) であり、(61c) もまた同列に見ることが出来るかも知れない。

- (61) a. *What did you see rising over the mountain* (= (24a) )  
 b. *The moon, I'd love to see rising over the mountain* (= (24b) )  
 c. *Observe the moon, my dear, rising over the mountain.* (= (25) )

これらの文は構造上も、意味上も基本文 (2a) = (56a) に最も近い関係を持つと認めないわけにはいかないであろう。(61a) は変形作用の制限された現在の変形生成理論によっても、最も確実視している WH-前置 (WH-Fronting) によるものであり、(61b) は話題化 (Topicalization) によるものであるが、移動変形しか認めない枠組の中でも変形規則として認められていく可能性があると思われる。また (61c) の間投詞の挿入はどんな理論とも無関係に構造の切れ目であることを感じさせる。いずれにせよ、これだけのデータをもってしても、真の P-PPVC は、(54a~c) あるいは (55a~c) に於ける NP Ving… 程に 1 つの単位に収斂した連鎖でないことは明らかであろう。

4.1.4 2.4に於いて、A. は原形不定詞知覚動詞句補部 (B-IPVC) が単一構成素ではなく直接 VP に支配された(独立した)NPとVPであることを示めず証拠を上げている。A. の議論に組みするものでなければ、なんらかの (S のような) 単一構成素であることを否定するものでもないが、ここでは B-IPVC がそれ程一つの単位に収斂したのではないことを、

さらに示すインフォーマントからの資料((61a~c)に対応する)(62a~c)と((22a, b)に対応する)(63a, b)を上げるにとどめる<sup>36</sup>

- (62) a. *What did you see rise over the mountain?*  
 b. *The moon, I'd love to see rise over the mountain.*  
 c. *Observe the moon, my dear, rise over the mountain.*
- (63) a. *What we saw rise over the mountain was the moon.*  
 b. *It was the moon that we saw rise over the mountain.*

4.2.1 3.1に於いて、Declerck(1982)は、A.が(派生構造ではB-IPVCと同じであるが)基底構造はNPを主要部とする一つのNP構成素と分析した(最も無標のケースである)P-PPVC(64a)と直接VPに支配されたNPとVPから成ると分析したB-IPVC(64b)は同じ基底構造Sから派生されたものであると主張している。

- (64) a. *I saw the moon rising over the mountain. (= (31a) )*  
 b. *I saw the moon rise over the mountain. (= (31b) )*

両者が知覚動詞のすぐ後に生ずる時、共に文法的(あるいは交替可能)であるとする主張は言うまでもないことであり、両者の違いは相(aspect)の相違であるとする主張も新しいものではないが<sup>37</sup>両者が(32a~c)のように等位接続されることは、(基底構造が同じとする根拠となり得ないとしても)基本的に同じ構造を持つことを示す重要なデータであると思われる。

Declerck(1982)では、P-PPVC(及びB-IPVC)が基底構造に於いてSであるとする論証は直接行なわれていないし、何故基底構造とは別な派生構造を持つとするのかについての論証も行なわれていない<sup>38</sup>しかし、D.の言う第3のPPVCとの対比で3.3.2に於いて取り上げられている(65a, b)は、本構造が基本的にSである証拠を示していることになるであろう。

- (65) a. *I saw it raining. (= (47a) )*  
 b. *We noticed allowance being made for the young. (= (47b) )*
- 一般に、天候のit, イディオム片切れ(idiom chunk)は、文法的形成素there, 外置変形の結果と考えられる文法形成素itとならんで<sup>39</sup>文の主語として生じなければならないことが認められているからである。

さらに本構造については、3.3.2及び3.3.3に於いて、NP {  $\begin{matrix} \text{Ving} \\ \text{V} \end{matrix} \}$  ...

の NP は知覚の直接の対象である必要はなく、全体が知覚の対象になる “the event of the moon rising over the mountain<sup>40</sup>” のような解釈を持つことが指摘されており、さらに3.2.4に於ける (66a~c) によって一つの単位に収斂した構成素ではないことの新たなデータが上げられていることになる<sup>41</sup>。

- (66) a. *Which mountain did John see the moon ris(ing) over?* (cf. (43b) )  
 b. *The mountain that John saw the moon ris(ing) over is called Mount St. Patrick.* (cf. (43c) )  
 c. *That mountain, John saw the moon ris(ing) over last night.* (cf. (43d) )

最後に、必ずしも基底構造とは異なる (例えば Subject-to-Object Raising による) 派生構造があり、そこからさらに派生されたとしなければならぬとは限らないが<sup>42</sup>、両構造が (32a~c) に加えて同じ構造を持つことを示めすデータを上げておく。

- (67)<sup>43</sup> a. *What did you {<sub>hear</sub><sup>see</sup>} coming and open the door?*  
 b. *The monster, I hate to {<sub>hear</sub><sup>see</sup>} coming and open the door.*  
 c. *What I {<sub>heard</sub><sup>saw</sup>} coming and open the door was the monster.*  
 d. *It was the monster that we {<sub>heard</sub><sup>saw</sup>} coming and open the door.*

4.2.2 3.2.1~3.2.4に於いて、D. は知覚動詞の直後以外の (A. が (3 a~c), (4 a~c), (5 a, b) で取り上げたのとほぼ同じ) 文に現れる NP Ving…連鎖を取り上げ、基底構造では NP に支配される S であり、表面的な構造 (superficial structure) では、NP が主要部で、Ving…が (省略された S である) 擬似修飾語句である単一の NP 構成素であるとする分析を行っている。

D. が (36a, b) で提案した基底構造、擬似修飾語句形成、及びその結果の「名詞主要部+擬似修飾語句」の構造が正しいものとするには今後の検討が必要であろう。しかし、これらの文の NP Ving…は、NP を主

要語とし Ving…を制限的修飾語とした1つの単位に収斂した単なる junction 構造でない場合があることが、(68a, b)に於ける単数一致によって明らかである<sup>44</sup>

- (68) a. The two of them playing together *has* seldom been observed by us. (= (38) )  
 b. Your teachers quarreling each other last night *has* been overheard by some of the students. (= (40) )

また、(69a, b) も NP が主要部ではないことを示しているが、さらに制限節を取り得ない固有名詞が NP 位置に生じていることも Ving…が制限的修飾語でないことを示していることになる。

- (69) a. *What* (\* who) I saw was *John kissing a girl*. (= (39a) )  
 b. *John and Bill walking about in our garden*, I've see it (\* them) often enough. (= (39b) )

以上のデータは(知覚動詞の直後以外に現れる) NP Ving…連鎖が真の P-PPVP と密接な関係を持つことを示しているが、ここで最も重視したいのは、両者の持つ相違が指摘されていることである。知覚動詞の直後以外では NP Ving…連鎖は現れることが出来ないという議論は言うまでもないとすれば、「真の P-PPVC は進行 (progressive) の読みしか許されないのに対し、知覚動詞の直後以外に生ずる NP Ving…は必ずしも進行の読みを取らなくてもよい」という意味判断に基づく、それ故に微妙な相違であるかもしれないが、D. によるこの指摘は両構造の関係の研究にとって見逃せない視点になるものと思われる。

4.2.3 3.3.1~3.3.3に於いて、D. は(知覚動詞の直後の)真の P-PPVC が3.1で取り上げた B-IPVC 及び無標の P-PPVC と異なる、いわば第2の構造を取る場合があることを指摘し、これに、(53)で示されるように、VP に直接支配された直接目的語である NP と目的補語である VP であるとする分析を与えている。

D. の議論は (70a, b) のような受動文は、対応する B-IPVC からの文を持たないことから始まり、このような文の主語 NP は、直接知覚の対象であるので、基底で S である B-IPVC 及び無標の P-PPVC の NP と異なり、能動文でも知覚の対象であるとするものである<sup>45</sup>

- (70) a. *John was watched moving the puppets* (by the children). (=

(48a) )

b. *The farmer was heard (by us) killing the pig.* (= (48b))

D.によれば, *I saw the moon rising over the mountain* のような能動形の P-PPVC は2種の構造を持つことになり, 当然2通りの意味を持たなければならないが, 無標の解釈は “*I saw the event of the moon rising over the mountain*”<sup>46)</sup> であり, 第2の直接目的語 NP+目的補語 VP 構造に対する解釈は “*I saw the moon as it was rising over the mountain*” のようなものであるとしている<sup>47)</sup>

D.が P-PPVC に与えた第2の分析は, 伝統文法(あるいは学校文法)が取って来たものと一致し受け入れ易いもの感じられるし, いずれ(50 a, b) の *find* や *catch* に対し与えられなければならない構造である<sup>48)</sup>。しかし, この分析は根本的には知覚動詞の後の NP が知覚の対象となり得るかどうかという pragmatic な意味解釈に基づいており, その統語論的証拠はこの NP を主語にした受動文が可能だからとする一種の循環論に陥ってしまう危険があるように思われる<sup>49)</sup>

注

27. ただし(3 c)については後述。
28. あるいは it と対置されていると見てもよい。
29. さまざまな人がこの関係に気付いていると思われるが, 特に榊原(1980), 葛西(1980)参照。榊原(1980)は外に *figure, picture, scene, view, spectacular (adj); sound, noise*などを上げている。葛西(1982)をヒントにすれば *feeling, sensation; smell; taste(?)*なども可能になるかも知れない。
30. *Right Node Raising* が構成素テストとしてどれだけ信頼の置けるものかは分らないが, (3 c) が (2 a) と非常に近い構造を持っていることは (28c) が\*\*<sup>2</sup>となっていることでも明らかであろう。
31. (Modal) (have en) (be ing) のうちのどの助動詞も現れず, また明白な補文標識を持たないだけで, Sとしての資格を持たないとする議論は弱いのではないか? 榊原(1980)は梶田(1976)に基づく補文標識を持たない (Tense を含まない) S<sub>i</sub>を提案している。
32. 筆者にはこの照応関係からの証拠の当否及び (42a, b) の Ving...内部の構成素には照応関係が成立つとする D.の議論を論評する資格はない。
33. D.はこれを *free adjunct* と呼び, A.の *extraposition theory* に反論

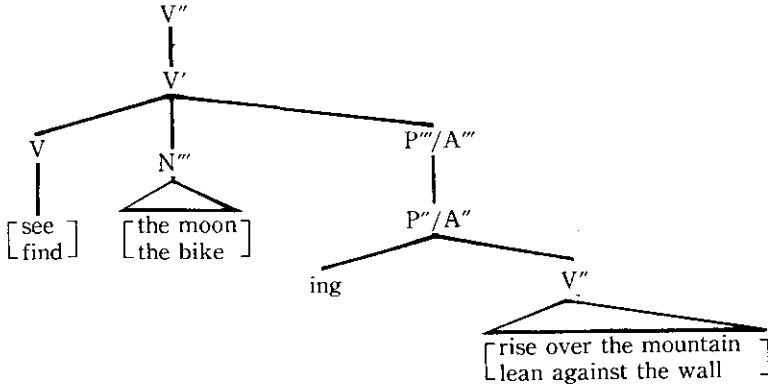


している。

34. 上山 (1980) には A. の提案する外置規則が通常の NP からのそれとは異なるとする別な根拠が述べられている。
35. (23)は (17b), (18b) と同様に (i)に関係づけられる構造であるかも知れない。注36参照。
  - (i) *Rising over the mountain, the moon is beautiful to watch.*
36. (23)に対応する (i) に対しては、インフォーマントの間にずれがあった。
  - (i) ? *The moon is beautiful to  $\left\{ \begin{array}{l} \text{watch} \\ \text{see} \end{array} \right\}$  rise over the mountain.*
37. ただし、P-PPVCが progressive を意味することは3.2.2で重要になる。なお両者の相違については中右 (1980) が最も有力に思われる。
38. Declerek (1981) に於いて行なわれているものと思われる。
39. 寺津 (1978) 及び榑原 (1981) 参照。
40. ここに現れる rising は D. が3.2.1で指摘したように進行と非進行の二重解釈を持つように思われる。インフォーマントは (i)は(ii)の2通りの言換えが可能であるとした。
  - (i) *I saw the event of the moon rising over the mountain.*
  - (ii) *I saw the event in which the moon  $\left\{ \begin{array}{l} \text{rose} \\ \text{was rising} \end{array} \right\}$  over the mountain.*
41. 原形不定詞についても同じ結果が得られたので合せて上げることにする。
42. この点については、(66a~c) も同じ。
43. (32a) 及び (62a, b), (63a, b) 参照。
44. ただし、この事実が、(69a, b) の事実と合せて、なんらかの S 性を持つ構造あるいは Nexus 構造であることを示していることは疑われないが、D. の主張する S である証拠とすることについては保留する。なお、(37), (40)に於ける複数一致の例は、4.1.2で述べたように、単なる junction 構造が生じているものと解釈すべきであろう。
45. (70a)が(i)のような、分詞構文あるいは D. のいう Free Adjunct に関係づけられるものではないことは詳細に論じられている。
  - (i) *Moving the puppets, John was watched by the children.*
46. 日本語に直せば、「月が山の上に登っているのを見た」となるであろう。なお、注40でふれたように、この書換え表現は *I saw the moon rise over the mountain* に対応する「月が山の上に登るのを見た」の解釈も持つように思われる。
47. 日本語に直せば「私は月が山の上に登っているところを見た」となる

であろうか。

48. Jackendoff (1977) の Deverbalizing Rule の一つである Gerundive (Participle でも良いだろう) PP ( $P'' \rightarrow \text{ing}-V''$ ) か、あるいは新たな Participle AP ( $A'' \rightarrow \text{ing}-V''$ ) によって、次の構造が考えられる。



49. この第2の P-PPVC は force 類 (加藤 (1972) 参照) に与えられる構造と同じものであるから P-PPVC が受動形の時は能動形の時とは意味が異なるはずであるし、B-IPVC の場合は逆に意味が同じはずであるが、寺津 (1978) によっても、ことはそれ程簡単でないことが分る。また P-PPVC は第2の構造を持つ以上、受動文以外にも B-IPVC が不可能な場合がもっとあっていいはずであるが、D. が名詞主要部+擬似修飾語句と分析した場合を除けば、外にないように思われる。(62a~c), (63a~c), (66a~c) 及び (67a~d) 参照。さらに、D. が必然的に第2のタイプのものであるとした(5)に対しても (i) が可能である。

(i) I saw John, and Peter saw him too, cross the road.

なお、榊原 (1981) では、Kajita (1977) をモデルとした「知覚動詞補文からの主語抽出規則」によって得られる派生句構造によって、この第2の構造が説明されている。

参考文献

- Akmajian, A. 1977. "The Complement Structure of Perception Verbs in an Autonomous Syntax Framework", in P. W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, p. 427-60. Academic Press.
- Declerck, R. 1981. "The Structure of Infinitival Perception Verb Complements in a Transformational Grammar," in L. Tasmowski -De Ryck (ed.) *Problems in Syntax* (to be published).
- , 1982. "The Triple Origin of Participial Perception Verb Complements", *Linguistic Analysis*, Vol. 10, p. 1 - 26. North-Holland.
- Gee, J. P. 1977. "Comments on the Paper by Akmajian," in P. W. Culicover, T. Wasow and A. Akmajian (eds.) *Formal Syntax*, p. 461-481. Academic Press.
- Jackendoff, R. 1977. *X̄ Syntax: A Study of Phrase Structure*. M. I. T.
- 梶田 優, 1976. 変形文法の軌跡. 大修館.
- Kajita, M. 1977. "Toward a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English*, No. 5, p. 200-40. Asahi Press.
- 葛西清蔵, 1982. 「That noise? It's some boys playing outside の構造—pseudo-modifiers' の再考—」, 北海道大学文学部紀要, 31-1号 p. 1-30. 北海道大学.
- 加藤力也, 1972. 「不定詞付き対格」の深層構造について, 北星論集, 9号 p. 31-45. 北星学園大学.
- 中右 実, 1980. 「テンス, アスペクトの比較」, 國廣哲彌(編), 日英語比較講座, 第2巻(文法) p. 101-155. 大修館.
- 楠原弘章, 1980. 「知覚意味と補文選択」, 英語学, 22号 p. 89-100. 開拓社,
- , 1981. 「英語の知覚動詞の補文構造について」, 安井稔博士選歴記念論文集編集委員会(編), 現代の英語学, p. 106-116. 開拓社.
- 寺津典子, 1978. 「動詞の補文構造を決定する証拠について: 使役動詞・知覚動詞の補文構造を考察して」, 富山大学人文学部紀要, 2号 p. 1-12. 富山大学.
- 上山恭男, 1980. 「知覚動詞の補文構造に関する一考察」, 北海道英語英文学, 25号 p. 88-98. 日本英文学会北海道支部.
- 安井 稔(編), 1975. 新言語学辞典. 研究社.

北星学園大学文学部北星論集第22号正誤表

頁	誤	正
4	(本文9行目) 要素の数 <u>全体数</u> を	要素の数 <u>全体</u> を
185	(本文1行目) Some <u>aspects on</u>	Some <u>Aspects of</u>
193	(本文17行目) NP <u>Ving</u> …連鎖は	NP <u>V</u> …連鎖は